

《中学生の部》優秀賞

博士を愛する自分

港中学校 二年

檜垣伊織

本の中の登場人物に会えるなんて夢のようだ。もしそれが可能なら僕は『博士の愛した数式』に出てくる博士一択である。

僕は小説を読むことが小学生のころから好きだった。今までたくさん読んできた中でもこの作品は何度も読み返すほど気に入っている本だ。

それに数学にも興味がある。特に博士と同じ、素数が好きで、これを読む前から三角数や完全数は知っていた。しかし、友愛数や双子素数、過剰数や不足数など知らない言葉がたくさんでてきた。それでも話の中で解説されるため理解することができ、読み進めるたびに知識がついたと思いき、嬉しくなってきた。博士は亡くなる直前まで数学の話をしていた。それほど数学が好きなのだという強い気持ちが伝わってくる。

博士は皆が想像しているような全てがしっかりとっている数学者かという、そうでもない。野球（阪神タイガース）が好きな部分やニンジンが嫌いな部分など、普通の人でも共感できる一面もあり、気さくな人なので、

話してみたら楽しそうである。

さらに博士はとても珍しい特技を持っている。一つは、言葉や文章を聞いたら即座に逆から読むことができるというもの。もう一つは夕方よりも前の時間帯で一番星を見つけることができるというものだ。どちらもそれほど役に立たない能力だが、もし会えるのならその能力を見せてほしいなと思った。

そして僕が思う博士の最大の魅力は、子供に対する心だ。博士は人一倍子供のことが好きで、この世で一番子供のことを大切にしているのではないかと、思うくらい優しい。普段大人に對しては、考え事をしている間は話しかけないでくれと言っているのに、家政婦の息子（あだ名はルート）が帰ってきたときは部屋を飛び出して迎えに行く。これほど魅力的な登場人物はいないのではないだろうか。こんなにも魅力があつて、自分とは趣味も似ていて、会いたくないわけがない。僕の勝手な想像だが、もし博士と会うことができたなら、一緒に数学について話したり、野球の試合を見に行ったり……いろいろなことを楽しんでいることだろう。博士のような何かに夢中で人に優しく時には共感もでき、皆の心を引き寄せる力があるそんな人になりたいと思った。

博士と皆の心はいつでも友愛数。

《中学生の部》優秀賞

『ファールブル昆虫記』を読んで

港中学校 一年

加藤優奈



『博士の愛した数式』
（小川洋子、新潮社、二〇〇三）

私が会いたいと思ったのは、『ファールブル昆虫記』の著者ジャン・アンリ・カジミール・ファールさんです。

なぜこの人に会いたいと思ったかという、夏休みの理科の宿題で、クマゼミの精密スケッチをし、今まではただただうるさくて、気持ち悪かったのですが、興味が湧いてきて試しに図書館で借りてみたら、とても面白くて、この本を書いて、実験などをしてるファール先生はとてもすごいと尊敬できるようになったからです。

私が読んだセミの部分のあらすじは、北国にはセミがあまりいないので、北国の人達はセミのことを知りませんでした。そ

して、セミについてかんちがいしてしまいました。これに先生は憤慨して、セミの生活を実際に調べて、かんちがいを訂正したのでした。

こうやってかんちがいしている人達がいるから、自分が調べて間違いを訂正しようとする先生は、セミのうるさい音が大嫌いなのに、すごいな、と感心しました。私だったら、他人事のようにしか考えられないと思いました。

真夏になると、どの虫ものどがかわいていて、セミが樹液を吸っていると、そのにおいをかぎつけて、たくさんのお虫たちがかけつけてきます。スズメバチや、ハエや、ハサミムシや、ア

ナバチ、ベッコウバチやハナムグリ、そしてあのアリ、といったところです。

この中で一番厚かましくて、一番しつこいのが、実はアリなのです。ファール先生は、アリが、セミの肢にかみついているのを見たことがあり、ついでに、夜、セミが木の幹で眠っている時でさえも、アリが肢にかみついている様子です。夜中にセミが「ギギ……」と鳴くことがあるのは、かみつかれてびびくりしたセミの声なので

す。しつこいアリは、セミの翅をくわえてひっぱろうとしたり、背中の上をずかずか歩いたりします。セミの細い管のような口をくわえて、木から引き抜こうと必死のやり取りを繰り返している所が、とても心に残りました。

この本を読むまでは、昆虫の世界には、無関心で気持ち悪くて、関わりたくないと思っていたけれど、ファール先生のおかげで、セミを好きになることができました。とても面白い実験やその結果などがまとめられていて、とても読みやすかったです。初めて好きになれた昆虫はセミなので、もともと知っていたことが出てきました。

また、他の話は読んでいないので、読んでみて他の昆虫も好きになっていきたいです。

一生かけて『昆虫記』を完成させたファール先生のように、私も先生に比べたらレベル

は低いですが、一度やると決めたらあきらめずに努力し続けられる人になりたいです。

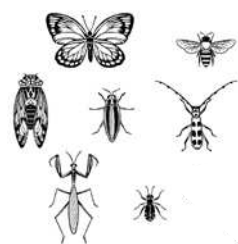
『ファール昆虫記3 セミの歌のひみつ』(J・H・ファール、岩波書店、一九九二)

《中学生の部》優秀賞

はやく本の中から出てきてください

星槎名古屋中学校 三年

竹内 杏 凜



きっかけは、英語教室で読んだあの本だった。本当に軽い気持ちで読んだだけだった。それなのにこんなにあの本の沼にハマッてしまい、五年間本の中から出てくるはずがない彼のことを待ち続けている。私の大好きな彼。それは『ハリー・ポッター』に出てくる「セブルス・スネイプ」だ。

私のスネイプ愛がどれだけ大きいかわからない。小説は、原作、日本語訳と読み、それぞれの言語を話すスネイプを堪能し、部屋で一人でニヤニヤしていた。映画は、原作のイメージをこわすのが嫌で、最初はためらったが、最終的に日本語、英語の両方見てしまった。映画に出てくるスネイプと小説に出てくるスネイプの姿がとてもイメージ通

りで、映画全八作を部屋で一人でニヤニヤしながら五周も見てしまった。家族でイギリスへ旅行に行ったときは、実際のハリー・ポッターの撮影で使われていたセットや小道具がある「ハリー・ポッター・スタジオ」へ足を運んだ。お土産コーナーでは、スネイプグッズを買いあさり、親に怒られてしまった。

USJに行ったときは、スネイプと同じつえを買い、ホグワーツの城にあるスネイプ先生の部屋に合言葉をちゃんと見て見学した。クルーにスネイプへの愛を長々と話してしまい、とてもおどろかされてしまった。

スネイプへの愛が良くわかったところで、スネイプのどこが好きなのかを説明しよう。まず、なんといってもあの何

を考えているか全くわからない謎めいた雰囲気だ。どんな秘密をあばきたくなるあの雰囲気

に本の中で初めて出会った瞬間、私は心をうばわれてしまった。あたかも物語のキーパーソンであるかのような登場の仕方がかっこいい。作者も言っていたが「影の主人公」にすぎない。

そして、かなり陰鬱な家庭に育ったということだ。この理由を言うのだ。私はスネイプの過去を知ったとき、スネイプを死ぬまで支えなくなってしまう。しかも、過去が陰鬱なのに、ハリーを守ろうとするとても優しい心を持つというのがもう言葉に表せないくらい大好きなのだ。あの見た目で実はすごく優しい一面を見て、ギャップ萌えとはこのことかと思った。まだまだスネイプの大好きなところはたくさんあるが、行数が足り

なくるのでここまでしておこう。

私がスネイプと会えたらまずプロポーズをするだろう。スネイプは話の中では結婚をせず亡くなっている。スネイプへのプロポーズに成功したら、妻というポジションを誰にもゆずらず、陣取ることができる。または、ホグワーツの生徒として魔法薬学か防衛術を一对一で教わりたい。でも、私はスネイプと同じ空間で同じ空気を吸うだけで失神してしまうと思う。

技術が今よりも発達して、スネイプと会うことができる未来が来ることを私はずっと願っている。

『ハリー・ポッターと賢者の石』(J・K・ローリング、静山社、一九九九)



《一般成人の部》最優秀賞

もやしのひげ根

——料理における愛情とは？

横山 美 菜

夕方、仕事を終えて子どもを迎えに行き、その後夕食の支度

にとりかかる。忙しい日によく私が作るのが肉野菜炒めだ。肉

は甘辛く味付けすると食欲をそそり、冷蔵庫の野菜を使うので無駄がない。しかし、時々野菜のポリウムが足りないことがある。そんなときに活躍してくれるのがあの野菜だ。昨今の物価高の中でも一袋三十円程度で買え、かさがあるのでポリウムも増え、加えてシャキシャキした歯ごたえがアクセントにもなってくれる。そう、それはもやしである。

今回私が読んだ『オルタネート』は、三人の高校生が主人公の群像劇である。その中の一人が調理部に所属していることもあり、様々な料理が作中にも登場したり、料理のコンテストのシーンも描かれたりしている。独創的で美味しそうな料理がたくさん登場するが、私はこの物語中に登場した、二通りの対照的なもやしの使われ方が印象に残った。

一つ目は、ヒロインの一人である蓉の実家の和食屋で、メニューの一品として登場するもやし料理。一本一本ひげ根をとって湯にくぐらせ、冷水でしめて調味料と和えられていた。二つ目はもう一人のヒロインである風津の家の夕食で登場したしょうゆ味のもやし炒め。「安かった」とか「味付けが同じ」などの家族の会話の中で食べられていた。

同じ食材なのに、この二つのもやし料理が対照的な印象を私に与えたのはなぜだろう？

『オルタネート』（加藤シゲアキ、新潮社、二〇二〇）



それは、食材が料理になるまでの扱いの違いではないだろう。前者は丁寧（丁寧）にひげ根を取られ、その後の工程も丁寧だ。後者は（洗ってはいらぬだろうが）そのまま炒められ、適当に味付けされているようだ。つまり、同じ食材でも調理過程の丁寧さなどで印象が変わり、その丁寧さを料理における愛情のようなものと捉えているのではないかと、私は考えた。

《一般成人の部》優秀賞

「大丈夫だよ」と言ってくれるから

池畑 佳美

ここまで考えてふと思った。食材を丁寧に下処理し、時間をかけて作ったものは当然美味しいはずだ。だとすれば、私が普段短時間で作る夕食の肉野菜炒めなどはどうなのだろう？ ある日試しにもやしのひげ根を取る時間を計ったが、一袋だけで約十五分かかった。それだけあれば、もう一品作れてしまうのではない。限られた時間の中で馬鹿丁寧に食材を扱う余裕など私にはない。短時間で作る私の夕食には愛情が込められていないのか？ いや、そうではない。そんな私の夕食にも愛情はこもっている、と私は断言できる。大切なのは、作り手が食べる人のことを思って作っているのだと私は思う。少なくとも私は家族の健康や成長を願いながら食事を準備している。もちろん時間をかけて下ごしらえをした料理は美味しい。けれども短時間で作っても、半調理品を利用して、料理に込められた気持ちや愛情は食べてくれる人に伝

誰かに「大丈夫」と言ってもらいたい瞬間があります。周りには、自分のことを信じて優しく見守ってくれる人たちがいる。知っているはずなのに、口下手でひねくれ者の私は、弱っているときほど自分の殻に閉じこもります。そんなとき、一冊の本が「大丈夫だよ」と言ってくれます。韓国のイラストレーター、ホン・ファジョンさんの『簡単なことではないけれど大丈夫な人になりたい』。彼女が日常生活の中で体験したこと、感じたことを描いたイラストエッセイです。心の病気を抱える彼女の毎日には、「自分を世界一好きになったかと思えば、身震いするほど嫌悪したりもしながら」と書かれているように、

色々な感情があります。その感情一つ一つが不思議と、自分の体験と重なります。本には著者の心の内を具現化したハートのキャラクターが登場します。苦しいと訴える心を責め立て、さらに心は縮こまって弱ってしまいます。自分に厳しすぎたことに泣きながら気づきます。彼女は「自分の心がどんな気持ちなのか、細かく理解してあげたい」と言います。私にとってこの本との出会いは、答え合わせのようでした。コロナ禍の二〇二〇年。家で一人過ごす時間の中で、自分の気持ち徐徐に整理されていくのを感じました。それまでは、自分の行動と気持ちがどこかちぐはぐで、常に不満を抱えていた

ように思います。苦しくてしんどくて、それでも「自分はダメだ」と責めて泣いた日々も、少しずつ心の弱音を聞けるようになったことも、著者と「一緒だね」と対話するような読書体験でした。

感想をSNSに投稿しました。あふれそうな気持ちを外に放ちたい気分でした。訳者の藤田麗子さんがいいねボタンを押してくださいました。自分の思いがまさか、本を作ってくれた人に届くなんて。

さらに私たちは前へ向かって一緒に進んでいます。何気ない幸せを丁寧にすくいあげる彼女に、手を取り引く張つてもらっているイメージです。私は最近、どんな喜びを感じたかな？ お店のお会計時に、貯まったポイントで値引きしてもらったこと。図書館の予約した本の順番がまわってきたこと。新しいレシピに挑戦したら失敗してしまっただけ、家族が「案外イケる」と食べてくれたこと。

もしかすると、著者のホン・ファジョンさんに実際に会える可能性もゼロではないかもしれません。海も、言葉の壁も乗り越えて。少なくとも、私の気持ちを伝えようとすることはできるはず。もしお会いできたら、伝えたいことは決まっています。たくさんさんの「大丈夫」をくれて、ありがとうございます。私は本の中の彼女に言葉をかけるように、自分に言葉をかけ続けます。「大丈夫だよ」

お気に入りの小説と共に本棚に並ぶこの本は、私のお守りです。苦しみを知っている仲間であり、人生を楽しく生きる先輩。最初に本を読み終えたとき、

『簡単なことではないけれど大丈夫な人になりたい』（ホン・ファジョン、大和書房、二〇二〇）

《一般成人の部》優秀賞

『三国志』から学んだ自分の生き方

暁高等学校 二年

吉田 光佑

私はそのときの感情に従って行動し、後悔したことが何度も

あります。例えばカッとなって相手に暴力を振るったり、親切